

## エヴゲニー・ザミャーチンにおけるイメージ

西 中 村 浩

ザミャーチンは1917年に「島の人々」を書いて後、ロシア象徴主義運動を既に過去のものとし、その遺産を継承する新しい文学の流れの一つとして自らの文学を位置づける。そして1921年に「われら」を完成するまでのザミャーチンの活動は作家の全ての時期のなかで最も重要な時期である。彼のこの時期の文学の特徴と発展は作品のなかでのイメージを考えることで特に明確に捉えることができる。

IO・トゥイニャーノフは「われら」について「幻想的なものはザミャーチンの手法の論理的な発展である」と書いているが、「島の人々」以後の作品の幻想性は、作家が捉えた現実と自分の世界観とを一つの比喩で表現し、これを中心的な比喩として（ミルスキーはこれを *mother metaphor* と名付ける）、それから連想される「派生的イメージ」で作品の個々の細部を描くことにより、作品を現実との直接の対応を失った一つの閉鎖的な空間に変容させることによって成り立っている。こうした象徴的なイメージと一連の連想的イメージとによる作品の幻想化は既に象徴主義者の詩作品においても見られるものであるが、ザミャーチンの作品においては、個々のイメージは作家によって予めテーマによって系統化され、他のイメージとの相互的な関連のなかで初めて意味を持つように構成されている。そしてこうしたイメージで表現される個々の人物や事物は単なる現実の描写ではなく、作品のテーマに関わる何らかの意味

を担わされたものとして、それ自体が比喩として考えられる。それ故、「われら」において、舞台となる未来社会やそこでの人々の生活の細部の描写は単なる作家の自由な想像ではなく、全て作家の世界観を表現するための比喩となる。このことは人物を一個の個性として描かず、作品のテーマを表現するために一定の役割・意味を予め与えられた類型的なものとして表現することになる一方、人物の行動や相互関係によって構成されるプロットと作品のテーマとを統一することにもなる。

さらに、このイメージの系統化は平面的なものではなく、叙述者・主人公の主観の導入とそのことばの様式化によって立体的に構成されている。そのため主人公の外の現実の主観的な表現である視覚的なイメージは、対象に対する主人公の反応とともに、主人公の主観と対象との関係、意識的、無意識的な心理的、及び社会的な関係をも表現するものとなり、一つ一つの表現が大きな表現力を持つものとなる。またことばの様式化によって主人公の内部の変化、対象の捉え方の変化が、そのことばの変化において表現される。そして各々の登場人物は主人公の心理的な側面を象徴するだけでなく、彼の精神的、思想的な側面、さらには社会的な人格の象徴として表現されることになる。そして系統化されたイメージは最後に一つのイメージ（外部の固い、冷たい殻と内部の火）によって統一される。

こうして「われら」を代表とするこの時

期のザミャーチンの作品を特徴づけるのは個々の特異なイメージではなく、イメージのほとんど全てが作品のテーマに関連して系統化されているということである。そしてこれらのイメージや象徴は、象徴主義者のそれとは異なり、何らかの現実以外の存在や、あるいは作品の外部の現実との直接の繋がりを失って、作品は内部で閉じた、一つの完結した世界を創り出す。そして個々の描写で社会や現実の断片(быт)の記述がなされるのではなく、作品全体が、作家が人間と社会の現在の状況として捉えた総合的なヴィジョン(作家のことばではбытие)の表現となるのである。

それ故、従来「われら」について論じら

れる際、そのソビエト社会批判の側面、あるいは部分的なイメージ、表現に着目しての合理性に対する非合理性等々の対立の側面などの一面だけが強調され、ザミャーチンの思想と結びつけられてきたが、こうした側面は作品で描かれる他のものと同様、一つの意識的に構築された総体である作品のなかで、他の要素と相対的に関連される構成要素の一つにすぎないものなのである。そして、文学作品は一つの完結した、独立した有機的な世界であるということを根拠にして、ザミャーチンは文学者の自由と文学の自律を作家の基本的な態度として主張したのである。

## 現代ロシア語の否定生格について

(他動詞の場合)

青 木 正 博

現代ロシア語では、他動詞(対格を支配する動詞および生格を支配する動詞を他動詞と定義する。)が否定されると目的語が生格形になる場合と対格形になる場合がある。

ПЬЕСЫ СОВЕТСКИХ ПИСАТЕЛЕЙ, том III-VI, Москва, 1973-1975 中の13の作品の会話体の部分を資料とし、12の条件のもとにおける対格形の頻度を調べた結果は以下の通りであった。

全体の平均38%, I) не иметь 0%, II) 強い否定 9%, III) 複数名詞 22%, IV) 知覚動詞 28%, V) 倒置 41%, VI) 完了体 44%, VII) 命令法 56%, VIII) 具体名詞 57%, IX) 間接否定 61%, X) 疑問節 74%, XI) а(я)-変化名詞 87%, XII) 人名 100%

P. J. Hopper & S. A. Thompson (1980) は下の表[次頁]の HIGH の方の特徴を多く持つほど、その節の他動性が高いとしている。

まず目的語の方では、III), VIII), XII) が J の Individuation of O と関連し、資料の検討より個別性は、高い方から人名、人名以外の人を表す名詞、身体の部分を表す名詞、それ以外の具体名詞、抽象名詞となる事が分かる。動詞の方では、IV) が B の Kinesis の他動性の弱い方の項目 non-action に対応し、この事は従来よりロシア語において、Грамматика (1960), 山口 (1976) が知覚動詞は他動性が弱いとしている事と一致する。VI) は C の Aspect と対応する。さらに R. Jakobson (1936) が、